

## 29【P2】Ⅱ-265

江戸馬医方本草に登場する生薬に関する研究その2

○市口 幸治<sup>1</sup>, 林 俊祐<sup>1</sup>, 畠山 有里<sup>2</sup>, 松井 桃子<sup>3</sup>, 乾 真由美<sup>4</sup>, 宮本 如奈<sup>5</sup>, 眞銅 智之<sup>6</sup>, 畠山 朋子<sup>7</sup>, 畠山 光弘<sup>7</sup> (生野高校,<sup>2</sup>四天王寺羽曳が丘高校,<sup>3</sup>富田林高校,<sup>4</sup>東住吉高校,<sup>5</sup>農芸高校,<sup>6</sup>藤井寺工業高校,<sup>7</sup>畠山獣医科)

【緒論及び目的】現在、動物医薬品のほとんどは西洋医学の領域でとりあつかうところの合成医薬品により治療がなされていますが、明治維新により諸外国との交流をもつ以前は、ほとんど漢方あるいは滋養薬としての民間薬が治療の中心的存在であった。今回馬を治療する目的で作られた馬医方本草と題された江戸期の書物を、江戸期馬医方本草に登場する生薬に関する研究その1に引き続き、その後半部分を紹介し、一昔前、いかに先人達は努力して動物を治療しようしてきたのか紹介する。馬医方本草は全文漢字とかな記述された版本である。また、同時にこれら生薬つまり薬草の知識がどの程度現在の高校生に引き継がれて来ているかを、アンケート調査することにより、薬草文化継承の問題点を考察した。

【方法】武田薬品杏雨書屋にて馬医方本草を複写したものを、順次訳すと同時に各生薬について調査した。また、登場する生薬や薬草をどの程度現在の高校生及びその親が知っているかをアンケート調査した。

【結論】当時、滋養薬や漢方薬により病を治療しようとした姿勢がみられ、人間同様に細かな薬品療法が記載されています。しかし、現在の高校生のほとんどは薬草の知識を持っているとは言えず、その親に関してもこの書物に登場する生薬を知る人は少なく、日本の文化の中、長い期間培われ継承されてきた薬草文化が危機的な状況にあると言え、専門家による啓蒙が必要であると言える。